



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

04

2015.02

▶ 理事長挨拶

一般社団法人 日本肩関節学会理事長 玉井和哉



2014年10月23日、井樋栄二前理事長の後任として日本肩関節学会理事長に選出されました玉井和哉です。世界でもっとも歴史のある肩関節学会を代表することは大変な栄誉であり、同時に責任の重さを感じています。全力で務めを果たしたいと思います。

日本肩関節学会は今、大きな節目を迎えています。2014年8月1日、それまでの任意団体から一般社団法人に変わりました。法的責任と義務の所在を明確にし、社会的責任を果たしていく体制がスタートしたことになります。定款にありますように、肩関節医学の進歩普及に貢献し、人々の健康に寄与することがこの法人の目的です。

さらに重要な節目として、日本肩関節学会は1974年の創立以来、40周年を迎えました。われわれにとってこれは誇るべき財産です。と同時に次の10年の始まりでもあります。50周年を迎えた時どうあるべきか、これを考えながら歩んで行かなければなりません。そのためにまず3つのことを目標にしたいと思います。

第1は井樋前理事長が掲げられた国際化 globalization をいっそう前進させることです。2014年には国際委員会の努力で新たにアメリカ肩肘学会 (ASES) に留学生を派遣することができました。従来のヨーロッパ肩肘学会 (SECEC)、韓国肩肘学会 (KSES) との交換留学制度とあわせて、3つの有力な学会と定期的に交流できることになったわけです。また第41回学術集会 (森澤佳三会長) では International symposium、English-speaking session が実現し、英語で発表・討論する場が大幅に増えました。会員の皆様にはこうした機会を活用して国際人になり、最終的にはご自身の研究や臨床実績を英文論文として上梓して実力を世界に示していただきたいと願っています。

第2は教育研修システムの充実です。我が国の肩関節外科を担う中堅・若手の医師が、存分に勉強する場を用意することは学会の重要な任務です。すでに日本肩関節学会では毎年、学術集会の翌日に教育研修会を開催していますが、このほかにキャダバー研修会を実施する準備を進めています。今後、現場の医師が求める研修の内容は、肩関節医学の進歩・発展にともなって変化すると思われるので、要望を調査し、それにマッチした研修の場を作りたいと思います。

第3の目標は2014年4月から使用可能となったリバーズ型人工肩関節を成功させることです。世界で浸透しているこの技術を、長所も欠点も分かってから導入することになった日本では、最も良い成績が出せるはずです。われわれの治療の選択肢として根付くことを目指して、適正使用のための環境作り、ガイドラインの再検討、登録システムの整備をしっかりとやりたいと思います。

これらのことを実現していく上で、代議員の役割は大変重要です。実際に学会の業務を進めるのは委員会であり、その推進力の源は代議員の方々の意思と意欲です。理事会は各委員会の決定事項を集積し、全体を見ながら

実行に移し、また次の企画を提案します。理事会と委員会ならびに代議員会とが双方向に連携することにより、真に会員のためになる事業を行っていきたいと考えています。

最後になりますが、二つほどご報告とお願いがあります。一つは2015年2月から事務局業務を株式会社アイ・エス・エス (ISS) に委託することです。2011年以降、群馬大学整形外科で事務局をお引き受けいただいたのですが、仕事量が格段に増え、1つの教室で業務をこなすことが困難になったためです。今までご尽力いただいた群馬大学の皆様に心から感謝いたします。新しい事務局がスムーズに機能し、皆様にご不便をおかけすることのないよう移転を進める所存です。

もう一つは日本肩関節学会の財務状況についてです。実は、学会が必要とする資金は不足しています。2013年に年会費を5,000円値上げさせていただきました。何度かお知らせしたようにこれはJSESの年間購読費50ドル相当分でしたが、現在では円安のため一人約6,000円の購読費を支払っています。さらに教育研修会、交換留学制度、委員会活動は拡大しており、必要経費が増大しています。もちろん各種経費を節減する努力はしておりますが、これから相当きびしい状況が続くと予想されます。会員の皆様にはぜひ年会費をお忘れなくお納めいただきたいと存じます。また寄附の募集など今後予定している種々の行動計画にご協力を賜りたいと存じます。

会員の皆様と力を合わせて、法人としての日本肩関節学会の足元を固め、整形外科の中で最も魅力ある学会にしていきたいと思っています。何とぞよろしくお願い申し上げます。



日本肩関節学会 理事

左から (敬称略)

井手淳二、畑幸彦、中川照彦、菅本一臣、米田稔、玉井和哉 (理事長)、井樋栄二 (副理事長)、柴田陽三 (副理事長)、望月由、末永直樹

▶ 前理事長のあいさつ

日本肩関節学会前理事長 井樋栄二

本学会は2012年の秋から理事・評議員制に移行しました。その初代理事長という大役を仰せつかりましたが、2014年の秋の学会で2年間の職責を全うし、玉井和哉次期理事長に無事に引き継ぐことができました。これも一重に会員の皆様からのご支援、ご協力の賜物であり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

この2年を振り返ってみますと、学会としての大きな事業は一般社団法人への移行が完了したことです。2014年8月1日付けで日本肩関節学会はそれまでの任意団体から一般社団法人に移行しました。法人格を有することにより社会的に団体として認知され、また法的にも守られることとなります。それに伴い、これまでの評議員は代議員となり、学会前日に行われていた評議員会が社員総会になります。これが従来の総会（学会初日に開催）に代わる会であり、学会運営に関わる重要事項はすべてここで決定されることとなります。従来の総会に相当するものはありませんでしたが、一般会員へ学会運営を直接お伝えする場がなくなるのは不都合ですので、当面は任意団体時代の総会を「会員連絡会」という名称で学会初日に行くことになりました。今後、代議員数を徐々に増やして会員の意見を学会運営に十分反映できるようにするつもりです。

法人化に伴い事務作業量が大幅に増え、これまでの群馬大学整形外科医局内に設置していた事務局では到底処理しきれないことが判明いたしましたので、外部委託する方向で業者選定作業を進め、去年10月の社員総会で株式会社アイ・エス・エス (ISS) に委託することが正式に決まりました。現在、玉井和哉理事長を中心に契約締結と事務局移転作業を進めているところであり、今年の春までには移転作業を完了する予定です。これまで学会の事務局としてご協力下さった群馬大学の高岸憲二先生、歴代の事務局長である小林勉先生、山本敦史先生に厚く御礼申し上げます。

さて、私が理事長として掲げた学会の方向性は国際化であります。日本の若者が内向き志向に偏り、内部完結型の人間が増えてきていることに対して、大きな危機感を持ったからです。若者の意識を変えることは簡単ではありませんが、学会全体として外向き志向を強めてゆくことは必要不可欠だろうと考えました。国際誌への発表の勧め、諸外国の学会との交流、学術集会の国際化、など様々な方法で国際化を進めてきました。日本肩関節学会の公式英文誌である JSES への日本からの掲載論文数は2012年が287編中16編(5.6%)でしたが、2014年には317編中49編(15.5%)と飛躍的に増加しました。諸外国との交流は、これまでの日欧 Traveling Fellowship と日韓 Traveling Fellowship に加えて、新たに米国との Traveling Fellowship も始めることにしました。学術集会は諸外国からの来賓に加えて、韓国からの参加者が年々増加しており、英語のセッションも増えてきました。とくに森澤佳三会長のもとで行われた第41回学術集会では第1会場のほとんどのプログラムが英語で行われ、海外からの先生方にも十分学術的な内容を楽しんでもらえたと思います。その他にも、学会賞である高岸直人賞にノミネートされた論文についても、これまでは雑誌肩関節に投稿することが義務付けられていましたが、その規制を取払い、どの国際誌に投稿してもよいことにしました。これも学会賞の質の向上に直結することはもちろんのこと、本学会から世界へ向けてより質の高い情報を発信することにつながります。また、去年の4月からようやく日本でも反転型人工肩関節が使えるようになりました。このように本学会は大きな国際化の流れの中で成長しつつあります。その構成員である会員一人一人の皆様のご支援・ご協力を引き続きよろしくお願い申し上げます。

この2年間、暖かいご理解とご協力をいただき、誠に有り難うございました。

▶ 役員（理事、監事）のあいさつ

副理事長 井樋栄二

2014年秋の第41回日本肩関節学会をもって初代理事長の任を終え、今年の学術集会会長の任に専念させていただくことになりました。理事長を務めさせていただいた2年間は皆様に様々な面からご支援をいただき、何とか職責を全うすることができました。ここに厚く御礼申し上げます。退任後、玉井和哉理事長から副理事長就任の要請をいただきました。大変光栄なことです。喜んでお受けすることに致しました。柴田陽三副理事長とともに玉井和哉理事長を支えながら学会の発展に尽力する所存ですので、何卒よろしくお願ひ致します。

玉井和哉理事長の新体制のもとで、私はリバーズ型人工肩関節運用委員会を担当させていただくことになりました。委員長は引き続き高岸憲二先生にお願いすることにしています。ご存知のように、従来の人工肩関節は肩の解剖学的な形態をそのまま模した形状の人工関節で解剖学的人工肩関節（Anatomic Total Shoulder Arthroplasty）と呼ばれていますが、骨頭と関節窩を入れ替えたような形状の人工肩関節が新たに登場し、形状が反転していることから反転型人工肩関節（Reverse Total Shoulder Arthroplasty）と呼ばれています。現在使われている反転型が世に出たのは1986年、フランスが最初ですが、その後、力学的な利点を有することから世界各国に広がり、2014年4月から日本においても反転型を使うことが可能になりました。これまでの新規医療材料導入の際に必要なとされてきた治験を行わない代わりに、日本整形外科学会のガイドラインを遵守することと、発売後5年間の全例登録が義務付けられています。現時点では症例登録が思ったほどには進んでいないようであります。反転型を使われる先生方におかれましてはぜひ登録をよろしくお願ひ致します。日本人工関節学会のホームページ（<http://jsra.info/jar-entry.html>）から登録用紙をダウンロードし、必要事項を記入したのちに登録用紙をFAXで学会事務局へ送っていただければ登録は完了です。また、この全例登録とは別に、学会主導で行っている日仏の初期合併症比較研究があります。こちらは学術委員会が担当しており、初期の100例を登録する予定です。これもインターネット上で登録症例の入力をお願いすることになりますので、合わせてご協力をお願ひ致します。

反転型は日本が先進国の中でもっとも遅れて導入したために、様々な合併症がすでに報告されており、ある意味では有利ということもできます。ただ、安易に適応を拡大することは避けたいと考えており、現時点では適応を厳格に守ることをお願ひしています。日本人の体格にうまく適合するのか、日本人特有の合併症がないのかなど、今後明らかにしてゆかなければならないことが多々あります。登録を通して、また学会などでの情報交換、情報共有を通して、よりよい医療を患者さんに提供できるように努めていきたいと考えています。皆様のご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

副理事長 柴田陽三

この度、日本肩関節学会副理事長に任命されました柴田陽三です。伝統ある本学会の副理事長に就任し大変光栄に存じます。精一杯努めさせて頂きたいと思ひます。私が副理事長の大役を拝命したのは、過去に18年間日本肩関節学会の事務を担当させて頂いた事があり、事務業務に精通しているであろうとご期待を頂いたものと拝察しております。玉井理事長の掲げる本学会の国際化の前進、教育システムの充実、リバーズ型人工関節の運用の成功を目指したいと存じます。

私は理事として二期目を任じる事になりましたが、一期目は社団法人化のための定款等検討委員会を担当いたしました。



1974年に任意団体として発足した肩関節研究会は、1990年に現在の日本肩関節学会に名称に変更され、昨年の2014年8月1日をもって一般社団法人となりました。日本肩関節学会は世界で最も早く設立された肩関節に関する分学会ですが、日本に引き続き各国にこの分学会が設立され、国際的に緊密な交流が行われるようになりました。このような学会業務の増大と一層の社会的責任を全うするため法人化を目指すこととなったわけです。その第一段階として2012年10月、任意団体のまま一旦理事評議員制度への移行がなされ、法人化のための定款等検討委員会が発足しました。その後、多くの苦労の末、念願の社団法人化を達成しました。この場をお借りしましてご尽力を頂いた会則等検討委員会、定款等検討委員会の委員の皆様に深謝申し上げます。

理事の二期目として二つの業務を担当する事になりました。一つ目は日本肩関節学会定款の運用について検討を行う定款等運用員会の担当です。運用された定款の問題点を明らかにし、実際の業務に対応できるよう種々の細則を整備してまいりたいと存じます。会員の皆様におかれましては定款に関する疑問点やご意見がございましたらご連絡頂ければ幸いです。

二つ目は学会財務の担当です。昨年の社団法人化と今年からは学会の事務局を株式会社アイ・エス・エス (ISS) に委託することになり、学会の支出項目に若干の変更が生じました。その中で、新規の事業として日本肩関節学会の official journal である Journal of Shoulder and Elbow Surgery の on line journal の閲覧が可能になりました。会員の皆様にとって非常に大きなメリットと言えます。

経費を節約することは重要ですが、本学会の発展のために必要な投資は積極的に行っていきたいと思っております。

はなはだ浅学非才の身ではありますが、肩関節外科学の発展のために少しでもお役に立てるよう尽力してまいりたいと存じます。

理事 井手淳二

新しく理事となりました井手でございます。どうぞよろしく願いいたします。

私は、1984年の卒業なので丁度30年経ちました。元々手術が好きでしたが1993年に大学に戻って以来、鏡視下肩関節手術の虜になり、現在も手術を手がけ、後輩の指導を行っています。1990年以降、米国の先生方が鏡視下肩関節手術を発展させ、それまで世界をリードしていた日本の肩関節外科はやや遅れをとったように思います。現在、フランスが最もアグレッシブであり、アジアでも韓国の躍進が明らかな情勢と実感しています。しかし、基礎研究では日本も健闘しています。私は2006年から腱板修復過程の促進と再生に関する基礎研究に着手し、大学院生とともに現在も奮闘中です。

理事会では、高岸直人賞決定委員会と40年史編纂委員会を担当させていただくことになりました。高岸直人賞決定委員会では、受賞候補者論文の選考と査読を行い、臨床、基礎各分野1名の受賞者を決定しています。受賞者候補論文選考基準には時代の変化に沿った改正が求められています。従来、受賞者は日本肩関節学会発表演題を雑誌「肩関節」に投稿した論文から選ばれていました。しかし、これでは国際雑誌に投稿した質の高い論文が選考からもれてしまうため、選考基準の改正を重ねています。

40年史編纂委員会は新規の特別委員会です。日本肩関節学会は40周年を迎えました。この節目の年に、この歴史を築いてこられた先人の業績をまとめ記録に残し、また今後も歴史を追記できるようなホームページを作成し、本学会の公式ウェブサイトに掲載する予定で準備を進めています。本年1月で事務局が民間企業へ移転することもあり、群馬大事務局に急な作業をお願いしているところです。

高齢者の増加と患者ニーズの高度化にともない、肩関節疾患の治療と予防を行う肩関節外科の整形外科領域における比重は増加しています。今後、現行治療のエビデンスの検証と効率的で質の高い外科治療と保存療法の確立が喫緊の課題です。そして、その成果を国民にアピールする必要があります。また、医療を含め



て社会のシステムが急激に変化する今日、本学会は一般社団法人化されました。時代のニーズに応じる柔軟性と独創性があり、国際的にも貢献できる学会であることが求められています。会員の声に耳を傾け、より良い学会となるよう尽力し、理事会に貢献できるよう精進いたしますので、重ねてよろしく願いいたします。

理事 末永直樹

1987年に医師になって以来、長らく北海道大学の整形外科および人工関節・再生医学講座で勤務していましたが2008年より札幌の整形外科北新病院の上肢人工関節・内視鏡センターで働いています。日本肩関節学会へは1989年に入会し、2002年からは幹事として参加させて戴きました。また2012年から初回理事として日本肩関節学会が理事・評議員制度が施行され法人化に向けた定款等の諸業務、また日本から世界に発信する国際化を進め、また広報委員会、財務委員会や学会のあり方ワーキンググループなど新たな設置により、さらに開かれた大きな組織として社会貢献できるよう、理事という立場で中でも教育研修会の担当理事および学会のあり方ワーキンググループの委員長として本学会の改革や発展に寄与してきました。昨年の日本肩関節学会において2年に一度の理事改選の選挙が行われ、再度理事として本学会の進展に対し寄与させていただけることになりました。

1974年に設立され、約40年の歴史と伝統と持つ日本肩関節学会も3年前の理事・評議員制度が施行されてから、井樋栄二前理事長を筆頭に理事会および評議委員会の活動においてスピーディな発展が遂げられつつあります。しかしながら、法人化後の諸問題や会員および演題・論文投稿数の増加に伴う事務局移転の問題、英文投稿としての日本からの情報発信の少なさなど数多くの課題が未だに残存しています。今後の2年間理事として典型的肩関節疾患の診療ガイドラインの策定や一般の方に対する肩関節の疾患の普及など学会の発展のため、また微力ながら現在、最年少の理事として若い先生たちの意見を聞きながら、理事会に反映できるよう頑張りたいと思います。

教育研修会の理事としての立場からですが6年間続いた学会翌日の教育研修会も本年度より様相を替えて行うことになりました。詳細については今後の日本肩関節学会ホームページ (<http://www.j-shoulder-s.jp>) を参考にさせていただきたいのですが、従来よりも多くの先生方に聞いていただくため、学会期間中に開催できるよう学会長の先生方をお願いしてあります。また実技の教育研修として札幌医大出身の北海道医療大学リハビリテーション科学部の青木光広教授の計らいで札幌医大解剖学第2講座の藤宮峯子教授、札幌医大整形外科学講座の山下敏彦教授のご協力を得て、札幌医大にてキャダバースタディーができることになりました。リバーショルダーが昨年度より日本でもようやく使用可能になり、グレンオイドの展開を含めた直視下手術に興味が集まってきていることから内容的には本年度は人工肩関節置換術（アナトミカル）を含めた直視下手術や肩周辺解剖を中心に行うことになりました。まずは10～12肩を使用し、教育委員会委員の5人の先生方に講師として2人1組で約10組の先生方にご参加いただける予定です。募集方法、費用に関しては混乱がないよう現在検討中ですが、公平性を保つため先着順となる可能性が高いですので、ご参加希望の先生方は本学会ホームページおよび本学会からのご連絡をお見逃しのないよう宜しくお願い申し上げます。

理事 菅本一臣

昨年の第41回日本肩関節学会はいくつもの記念すべきできごとのあった学会でした。ひとつには学会が一般社団法人に移行して初めての学会であり、もうひとつは学会の設立40周年を祝って様々なイベントが企画されたことでした。社団法人化された際に選出された10人の理事の中には私も加えていただきましたが、学会員も1500名を超えようとしており、学会に与えられた社会的な使命を果たすために玉井理事長



の元、一丸となって努めたいと思います。私はその中で、国際委員会と倫理委員会を担当することになりましたので、その御紹介をさせていただきます。

国際委員会は法人化前から既存のものでしたが、今回も引き続き同じメンバーで、菅谷啓之委員長と他の5人の委員で構成されています。学会の大きな一つの方向性として国際化ということが挙げられおり、それをどのように実現するのかを委員会では検討し、またそれを実現させようと考えています。これまでも日韓および日欧交換留学制度がありましたが、毎年交互に希望者を募って派遣して参りました。肩関節外科をめざす先生方に広く世界を知っていただき、逆に訪日される先生方に日本を知っていただくことは、単に国際学会に参加して討論をするだけと比べて友人関係を構築することもでき、かけがえのない制度と考えています。昨年度からは米国への留学制度も菅谷委員長らのご尽力により実現させることができ、国際交流という意味での国際化は前進していると思います。また2013年名古屋での開催をいたしました国際肩肘関節学会やアジア肩関節学会への貢献も求められておりますので、そうした活動を通じた国際化にも努めたいと思います。

もうひとつの倫理委員会は新設となります。私は現在大阪大学に所属いたしておりますが、大学内でも近年様々な活動に対して倫理を求められており、それを審査するシステムが数多く立ち上げられています。肩関節学会でもその重要性を玉井理事長が認識されての設立となりました。現在委員は7名、アドバイザー1名が決まっています。倫理委員会では大きく2種類の活動を行うべきと考えています。1つは研究を行う上での倫理についての検討です。新しい研究を行う上で、時として研究手法や手術手技がオリジナルであるがために従来のものをやや逸脱する場合があります。これまでの学問の進歩を振り返ってみると、そういった積み重ねが学問を進歩させた点は否めません。しかし、近年の社会背景がそうであるように社会的倫理の概念も以前と比べて大きく変わってきています。学問においても当然そうあるべきでしょう。もうひとつの役割として研究以外の活動に対する倫理的検討を行う必要があると考えます。アンケートをとる場合の個人情報の問題であったり、企業からの支援など多岐にわたる活動に対しても検討を行っていきたいと考えています。

できるだけ活動が見える形で活動を行っていく所存ですので、学会員の先生方には多くのご意見を頂戴しよりよきものをめざしていきたいと思います。よろしくご支援のほどお願いいたします。

理事 中川照彦

今回雑誌「肩関節」編集委員会の担当理事に就任した中川照彦と申します。私は1984年に故福田宏明会長のもとで開催された第11回肩関節研究会で初めて発表しました。それ以来、第41回日本肩関節学会まで、毎年欠かすことなく連続31回発表（講演を含む）しています。私が自慢できるものはこれくらいしかありませんが、肩関節学会にそそぐ愛情は人に負けないものがあります。1996年に幹事となり、夢であった学会長も3年前に経験し、昨年2月に還暦をむかえました。もう上がりでもよいかと考えていましたが、ここはもう一踏ん張りして日本肩関節学会に貢献したいと思うようになり、昨年の理事選挙に立候補した次第です。

これまでJSES査読委員会や社会保険等委員会に属しておりましたが、今回初めて雑誌「肩関節」編集委員会に所属することができ、非常に嬉しく思っています。ちまたでは雑誌「肩関節」への投稿は提出期限が厳格で査読も厳しいと言われております。私も何度も厳しい査読に苦しみましたが、自分の独断的な思考が査読を受けることで視野が開け、真摯な態度で訂正することによりほとんど全ての論文で内容が格段によくなりました。査読された先生方には本当に感謝しております。

私は雑誌「肩関節」をさらに充実した内容にすべきと考えています。幸い昨年からはネット配信になったことから術中のカラー写真やわかりやすいカラーのグラフなども掲載可能になりました。さらに将来的にはス

スマートフォンやタブレットでの2次元バーコードなどの読み込みにより動画とリンクできるようになれば、鏡視下手術の手技や肩の動態解析など動画でしか伝えられない内容を見ることが可能になり学会員への寄与は多大なものになると考えます。

今回から投稿や査読も全てネットで行われるようになりました。郵送による手間、紙代・インク代の節約、瞬時に送・受信が可能となり、投稿者および査読者にとってもいいことづくめです。また雑誌「肩関節」のオンライン化により、雑誌の莫大な印刷費を削減でき、厚い雑誌の郵送業務や郵送費もなくなり、本学会の財政的な面でも有益です。さらに雑誌の保管場所が不要になり、読みたい号だけがどうしてもみつからないというマーフィーの法則のような呪縛からも解放され、読みたい論文をすぐにPDFファイルで閲覧できるようになりました。もちろんカラー印刷もできます。

編集委員会の構成メンバーは担当理事が中川照彦、委員長が濱田一壽先生、副委員長が岩堀裕介先生と内山善康先生の2名、委員が石毛徳之先生、石田康行先生、伊藤陽一先生、岡村健司先生、柏木健児先生、菊川和彦先生、北村歳男先生、後藤英之先生、後藤昌史先生、小西池泰三先生、小林尚史先生、西須孝先生、下川寛一先生、杉本勝正先生、鈴木一秀先生、田中稔先生、中川滋人先生、中溝寛之先生、橋詰博行先生、原正文先生、丸山公先生、村成幸先生、山崎哲也先生（五十音順）の23名で、合計27名にて構成されております。

私は新米の担当理事ですので経験豊富で博識の濱田一壽委員長のご指導を仰ぎながら委員長を全面的にサポートしていく所存です。皆様のご支援を今後ともよろしくお願い申し上げます。

理事 畑幸彦

今回、QOL評価表検討委員会と学術委員会の担当理事に再任していただきましたJA長野厚生連 安曇総合病院院長の畑幸彦です。中部地区の中堅・若手会員の学会に対する期待や要望を理事会に伝えるとともに、理事会の運営・企画に積極的に参加したいと考えています。今回2期目の理事に立候補したのは、中部地区、特に北信越地区の仲間とともににより充実した治療と研究ができるような環境づくりや人材育成に力を注ぎたかったからです。将来を担う若い会員の先生達にかつて私達が体験した緊張と興奮、そして大きな充実感を感じてもらえるような魅力的な学会になるように頑張りたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

【QOL 評価表検討委員会】

委員：衛藤正雄先生、相澤利武先生、酒井清司先生、名越充先生

顧問：三笠元彦先生

日本整形外科学会から「日本発信で世界に通用する患者立脚型の評価表」の作成を指示され、スタートした委員会です。丸山公先生（前々委員長）を中心に「患者立脚肩関節評価法 Shoulder 36 V.1.3」が作成されました。特筆すべきは日本語版と英語版の両方を同時に作成し、native speakerによる互換性の検証も済んでいる点です。今年度はShoulder 36の最終段階の検証として、腱板断裂、肩関節周囲炎および外傷性肩関節不安定症に対する評価の反応性と信頼性の調査結果を統計学的に解析し、第42回日本肩関節学会で発表する方針です。

【学術委員会】

委員：森澤豊先生、柏木健児先生、後藤昌史先生、佐野博高先生、高瀬勝己先生、

浜田純一郎先生、林田賢治先生、森原徹先生、山本宣幸先生

Prospectiveな多施設間研究を学会主導で行うことが目的の委員会です。



肩鎖関節脱臼の保存的治療：この調査への協力施設を日本肩関節学会のホームページ上で募集してまいりましたが、当初の目的である60施設に達しましたので募集を終了させていただきました。参加登録をしていただいた会員の皆様に深謝いたします。

リバース TSA 初期合併症調査：登録フォームと登録マニュアルが完成し、平成26年4月から手術を行った初期100例を対象とした調査を実施することになりました。委員会から会員の皆様に個別に依頼して約70%の施設が協力して下さるとのお返事をいただきました。誠に有り難うございます。平成27年1月末を期限としてさらに多くの施設の参加をお願いしていきたいと思っています。

腱板断裂鏡視下手術成績比較 DR法とSB法：総数600例を目標に、術後成績や画像変化について検討する研究です。調査のプロトコルができましたので、理事会での承認を得てから調査をスタートします。日本肩関節学会ホームページ上に多施設間研究の計画を掲載し、会員の皆様に周知していただいた後、参加希望の施設に資料を送る予定です。

腱板断裂自然経過：現在、研究のプロトコルを作成中です。

理事 望月由

この度、伝統ある日本肩関節学会の理事に選出されました望月由です。

1985年に日本肩関節学会に入会させていただき、2009年に幹事に就任、その後プロジェクト委員会と教育研修委員会の委員会活動を行わせて頂きました。この度、日本肩関節学会のさらなる進歩と発展のために理事会の運営・企画に参加させて頂き、精一杯努力したいと考えております。

日本肩関節学会の世界の肩関節外科における貢献は目覚ましいものがあります。しかし、われわれの先駆者である日本肩関節学会の先輩方が達成した多くの偉業を知らない若い世代の先生方が徐々に増えてきています。若い世代の先生方に対して先駆者たちが使命感をもって、創意と工夫を積み重ね、貴重な研究成果に至った経緯、方法論を伝え、今後の発展の礎にする必要があると考えます。そして、日本肩関節学会の歴史を振り返り、現状を正確に把握し、アジアをはじめとした世界に目を向け、さらに世界に向けて情報を発信できるように精一杯努力していく所存です。そのためには、まず理事会と委員会ならびに代議員会とが双方向に連携することが肝要であり、広報委員会を担当させていただくことにより、真に会員のためになる事業を行っていきたいと考えています。

広報委員会は、日本肩関節学会が理事長制度となってできた委員会なので比較的新しい委員会です。委員会の主な活動は、日本肩関節学会を広く人に知らせることと、日本肩関節学会員に情報を発信していくことの二つです。このために、日本肩関節学会ホームページを充実するとともに、英語版ホームページも充実させることが大切と考えております。また、会員へのニュースレター作製も重要な活動と考えております。

今後も、日本肩関節学会の広報活動に積極的に取り組んでいく所存ですので、宜しくご指導の程お願い申し上げます。

理事 米田稔

良きも悪しきも昨年は激動の年であった。

30年近く在職した大阪厚生年金病院を3月に定年退職、4月、中之島いわき病院（NIH）に「劇団ひとり肩クリニック」を開設、後期研修医としてリスタート。

5月ゴルフ中、蜘蛛の巣に驚き「腓腹筋肉離れ」、JOA神戸では信原克哉先生の特別講演の座長席まで松葉杖で這い上がる始末。



8月、インド・ムンバイでの関節鏡学会に招かれ6つのセッションと1つのライブサージェリーの栄誉を頂く。最終枠のライブであったため時間切れで生中継は途中で終了。Sold-out状態の残りわずかのアンカーで何とかARCRを切り抜けるも、下半身ずぶ濡れ状態。シャワールームもタオルもなく、半湯きの術衣で身体を拭い、スラム街をぬけムンバイ空港へと向かう。

9月、悪いことばかりではない。シチリアではエトナ山の麓で足踏み製法ワイン「イッレガーレ（違法）」に出会い、2ダースを大阪へ空輸。プロデュースしているサルヴォ・フォーティ氏に気に入られ、今年10月“足踏み”への招待を受ける！

しかし10月、嬉しいようで最も悲しい出来事。中川照彦先生が第2期JSS理事に就任！と同時に、それまで二人三脚で頑張ってきた中川先生は社保委員長を退任、社保等委員会から完全に去ってゆく……。極めて複雑な心境であった。

思えば十年前、当時社保委員長であった三笠元彦先生から突如社保委員長の命を受けた私は全くゼロの状態から診療報酬改定のしくみについて勉強するしかなかった。日本関節鏡学会の社保委員を兼任していたこともあり、手根管内視鏡手術のパイオニアであるO先生から「まずはこの外保連試案の勉強からだね」と東京弁で分厚い緑本を渡される。「でも、試案が完成したとしてもほとんどは空振りだからね」とまた東京弁で温かいお言葉を頂戴。無駄と思いつつ毎年毎年、社保メンバーの諸先輩方に手伝って頂き、外保連試案を作成、案の定、空振りの連続。そのうち、JOA外保連WGやJCOAとの太いパイプが重要であること、また外保連試案にはそれを裏付ける、つまり説得するだけの客観的データも不可欠であることを知る。その後は社保メンバーが一丸となって、これら諸学会とのコネクションや肩手術アンケートの立案作成に奮闘努力。そこで時間を惜しまず粉骨砕身してくれたのが中川先生だったのである。そして2010年、ついに青本に「肩腱板断裂手術」が収載される。その後、肩手術アンケート調査の甲斐あってか、続く2012年には念願の「関節鏡下肩関節唇形成術」、そして「肩腱板断裂手術（複雑なもの）」が収載された。同年、私が第1期理事に就任するや否や、中川先生は社保委員長を引き受けてくれるどころか、さらに外保連とのパイプ役として実務委員まで献身的に買って出ってくれたのである。おかげで私は第1期理事の仕事として、底辺で学会の国際化を支えることが出来たし、またリバース型人工関節の導入にも力を注ぐことが出来たのである。

再び10月に戻り……。その悲しみも束の間、12月某日に第2期理事長の玉井和哉先生から素晴らしい案を頂戴した。中川先生が外保連とのパイプ役として大切な人材ということであれば、社保等委員会の副担当理事ということではいかがかと。私は九死に一生を得た気分であった。

さて、理事二期目を迎え今更ながら責任の重みを感じている。担当である社保等委員会をリードしてゆくことはもちろんであるが、今後は、何に対してももっと強い日本肩関節学会を作り上げるために貢献してゆきたい。

監事 福田公孝

二期目の監事を務めさせていただくことになりました福田公孝です。法人化に伴う事務量の増大や事務局移転など、監事の果たすべき責任が重大になってまいりました。学会の運営、事業、財政などに対して、（一般社団法人）日本肩関節学会の会員の皆様の「目」となり、「耳」となり、そして物申す「口」となり監事の役割を果たしてまいります。会員の皆様、代議員、理事、事務局のご協力をお願い申し上げます。

監事 山中芳

日本肩関節学会は、欧米諸国の肩関節学会に先駆け、1974年、日本肩関節研究会として発足しました。第1回日本肩関節研究会では、11演題が議論されました。その後、毎年学術集会は開催され、1991年第18回学術集会では日本肩関節学会と名称が改められました。2014年には、森澤佳三会長のもと、佐賀市で第41回学術集会が開催され、参加人数は1416名、発表演題は471題に及びました。また、2014年6月30日現在、学会員数は1647人です。学会の形態も2014年には任意団体から一般社団法人と形態を改め、理事、代議員制で活動を開始し、現在に至ります。

現在、肩関節外科の臨床では鏡視下手術が広く行われるようになりました。若い整形外科医は変革を遂げる新しい領域に興味を持ち、注目します。今回の学会も若い整形外科医の参加が多い様に思いました。今後も肩関節外科が若い整形外科医にとって魅力ある領域であり、そこで基礎、臨床、学問、人間を磨き、友人を増やし、世界に羽ばたいてもらいたいと思います。日本肩関節学会がその良い場を提供できればと思います。また、肩関節外科の研究の中で、若い先生方には一見新しい考え方、新しい真実と思われたことも、先達が、肩関節学会の歴史の中ですでに研究していることもあるでしょう。若い先生方には先達の論文をさらに追求して頂きたいと思います。本学会が、経験ある肩関節外科の先生方には新しい知識、情報、技術を適切に提供する場であって欲しいと思います。

現在、本学会も大きな潮流の変化が起っています。私は、2013年9月から日本肩関節学会監事の重任を拝命されています。本学会の運営が、会員皆様のために、公明正大に、滞りなく施行される事を見守り、意見も述べていきたいと思っています。微力ながら、福田公孝監事とともに、会員皆様のお手伝いができれば幸いです。

▶ 第41回日本肩関節学会学術集会の開催を終えて

第41回日本肩関節学会 会長 森澤佳三（特定医療法人 整肢会 副島整形外科病院）

第41回日本肩関節学会学術集会および第11回肩の運動機能研究会（会長西川英夫）を昨年10月24日～25日に佐賀市文化会館・佐賀県総合体育館において開催させていただきました。幸いにして当日は晴天に恵まれ、1,400余名の参加者をお迎えし、無事終了することができました。開催に際しましては日本肩関節学会の役員の方、名誉会員の先生にはお世話になりました。特に役員の方には演題採用の査読の段階から、一般演題、シンポジウム、モーニングセミナー、ランチョンセミナー、イブニングセミナー、ハンズオンセミナーなど多くの企画に講師、座長としてご協力をいただき誠にありがとうございました。本誌面を借りて心から御礼申し上げます。



本学会は、Globalization 日本から世界へ をテーマに掲げており、国際化の重要性を理解し実践して頂き

たいと考え、特別講演、会長講演をはじめとして英語での発表及びディスカッションを実行しました。

特別講演としては海外から出席いただいた4名の先生方にそれぞれ“Indication, long time results and complications of reverse TSR (RSA)”をFrank Gohlke先生、“The Neer Legacy: Then and Now”をFrances Cuomo先生、“Are Serum Lipids Involved in Primary Frozen Shoulder?”



A Case-Control Study” と “Cytotoxic Effects of Ropivacaine, Bupivacaine, and Lidocaine on Rotator Cuff Tenofibroblasts” を Hyung Bin Park 先生、“Clinical Outcomes after Reverse Total Shoulder Arthroplasty in Korean Population” を Yong Girl Rhee 先生に講演していただきました。

国際シンポジウムでは、「広範囲肩腱板断裂の治療戦略」をテーマに掲げ、座長は Yong Girl Rhee 先生、菅谷啓之先生の2名の先生方をお願いし、シンポジストとして国内から菅谷啓之先生、末永直樹先生、三幡輝久先生の3名、海外から Jin Yong Park 先生(アジア)、Frank Gohlke 先生(ヨーロッパ)、Frances Cuomo 先生(アメリカ)の3名の先生方に現在の治療の実態と今後についてお話いただきました。しかし、ディスカッションの時間が不十分で充実した討議が行えずやや残念な感は拭えませんでした。その他の4つの英語のセッションも最初の取組としては座長、演者の協力のもと特に問題もなく順調に行われました。第一会場の演題は大部分が英語の発表となり、特に海外からの参加者に好評でした。



また、今回はこれまでより多くの多様な内容のセミナーを実施しました。モーニングセミナー、ランチョンセミナーでは、医療安全対策の視点より「医療チームの安全を支えるノンテクニカルスキル〜スピークアップとリーダーシップ〜」、最近の学会でしばしば引用される「腱板断裂性関節症のレントゲン分類と治療法の選択」、その他にも腫瘍、疼痛、超音波診察など盛りだくさんの内容のセミナーを最も適任と思われる先生方にお話いただきました。教育講演としては「肩関節障害に対する装具療法のポイント」を地元佐賀大学の浅見豊子先生にお願い

しました。イブニングセミナーではリバー型人工関節を含む人工関節や腱板断裂など多種多様な内容に関して、それぞれの分野のパイオニアである先生方、最も経験されている先生方に講演をしていただきました。それらの手術器具や器材が翌日実際に器械展示場で手に取ることが出来たため好評でした。

今学会が日本肩関節学会設立の40周年にあたり40周年記念講演会をおこないました。座長は高岸憲二先生をお願いし、これまで日本肩関節学会の発展に多大な貢献をされた先生方にそれぞれ「日本肩関節学会の黎明」を信原克哉先生に、「日本肩関節学会としての国際交流」を小川清久先生に、「アジア肩関節学会の発足」を筒井廣明先生に、「事務局から見た日本肩関節学会の40年」を柴田陽三先生に講演していただきました。会員の皆さまにこれまでの本学会の歴史を知っていただく良い機会になったものと確信しています。

当初、一般の方々へ市民講座を予定しておりましたが、より多くの佐賀の人々に肩の病気を知っていただけるように学術集会の開催前に佐賀新聞に紙面講座として掲載しました。

2日間という短い会期ではありましたが、参加者に満足していただけた学会が出来たと確信しています。学会運営にあたり不慣れな点が多々あったかと存じますが、協力していただいた会員の皆さまに感謝し、重ねてお礼申し上げます。



▶ 次期学術集会会長あいさつ

第42回日本肩関節学会 会長 井樋栄二 (東北大学医学系研究科外科病態学講座整形外科学分野 教授)

第42回日本肩関節学会を2015年10月9日(金) - 10日(土)の2日間に亘って仙台で開催させていただくことになりました。伝統のある本学会を仙台で開催させていただけることは大変光栄なことです。仙台開催は1988年(第15回)の櫻井實会長、2010年(第37回)の熊谷純会長に続いて3回目ということになります。実りある学会を目指しますので皆様のご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

本学会のテーマは「肩の病態解明を目指して」です。最近では鏡視下手術が進歩し、技術を追い求める風潮が強まっていますが、もっと大切なことは病態の解明です。病態の解明なくして医学の進歩はありません。なぜ腱板が切れるのか、なぜ脱臼が起こるのか、なぜ凍結肩では関節包を切離しても脱臼しないのか、など肩領域の「なぜ」は尽きません。「なぜ」を追い求めるところに医学の進歩があり、発展があります。その先に患者へ還元できる新たな医療があります。とくに日本肩関節学会の持ち味は基礎研究です。症例数では何千、何万という数をこなす海外のセンターにはとてもかないません。しかし、病態解明では1歩も2歩も先を歩んでいると確信しています。この日本肩関節学会の強みをさらに発展させ、世界に発信してゆくことがこの学会の使命です。ぜひ病態解明に関わる演題を数多く発表して下さいようお願い致します。去年の第41回本学会では森澤佳三会長がGlobalizationをテーマに英語セッションを大幅に増やして下さいました。この流れを後退させることなく、国際化、世界化の流れを押し進めて行きたいと考えています。今回は国際化ということで、4大陸の重鎮に講演をお願いしました。ヨーロッパからはオーストリアのHerbert Resch先生、アジアからは韓国のKwang-Jin Rhee先生、北米からは米国のRobert Neviasser先生、南米からはブラジルのSergio Checchia先生をお招きしています。各大陸での肩関節外科発展の歴史に大陸間の交流がどのように役立ったかを中心に話していただき、日本からは信原克哉先生に日本と諸外国との肩交流の歴史についてお話いただく予定です。

仙台は2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害を受けました。今でも沿岸地域では復興は思うように進んでいません。今回の学会ではオプションツアーの一つとして被災地見学ツアーを企画しました。写真やテレビでみるのと本物を自分の目で見るのとでは大違いです。まだ一度も被災地を訪れたことのない方はぜひこの機会に被災地をご自分の目で見ていただきたいと思います。それが明日からの防災意識の向上に必ずつながります。

仙台で皆さんのお越しを心からお待ちしております。

▶ トラベリングフェロー帰朝報告

JSS/ASES Traveling Fellow

山本宣幸 (東北大学)

この度、第1回Japan-ASES (American Shoulder and Elbow Society) Traveling Fellowとして4週間米国の施設を訪問する機会をいただきましたのでご報告いたします。2014年9月22日に西海岸を出発し最後は東海岸まで合計7施設8箇所を北海道大学の船越忠直先生と一緒に旅しました。本報告は船越先生と分担し、それぞれが希望した施設について報告させていただきます。私が訪問を希望した施設はSan Antonio Orthopaedic group、Florida Orthopaedic institute、Harvard/Massachusetts General Hospitalです。



Dr Burkhardt 夫妻とバギーで別荘内を散策。

San Antonio Orthopaedic group の Dr Burkhardt は Deadman theory, cable theory, engaging Hill-Sachs lesion など数多くのアイデアを生み出した先生であり、ほとんどの症例を鏡視下に手術することでも有名です。Ranchと呼ばれる大牧場のある別荘に泊まらせていただき、Dr Burkhardt から直接治療のコンセプトや手技についてゆっくり話し聞けたのは私によって本当に有意義な時間でした。彼の鏡視下手術は他の人がまねできず「マジック」と揶揄されることもあります。Dr Burkhardt の話しを聞いて、一つ一つの手術手技できるようになれば「マジック」ではないと実感しました。腱板修復の際に肩峰

下スペースをしっかりと確保していました。肩峰下除圧術を行う際に意外にも 30 - 40 分かけて内側は筋腱移行部まで前方は烏口突起まで軟部組織を切除し広いスペースを作り、それから腱板修復を行っていました。肩甲下筋修復には 70 度斜視鏡を使用しており、これも視野を確保するのにいい方法ではないかと思いました。

Florida Orthopaedic institute では DJO のリバース型人工関節を開発した Dr Frankle の手術や外来を見学しました。40 代の若い人から骨折までリバース型人工関節を多くの症例に使用しておりました。リバース型人工関節術後の動作解析やバイオメカ実験も数多くやっており、臨床から研究まですべてリバース型人工関節一色の施設でした。リバース型人工関節をやり始めたばかりの私にとって実際の手術手技やコツを学ぶいい機会になりました。OA 症例で関節窩がお椀状に変形し関節窩骨欠損が大きい症例に対しては、切除した骨頭を用いて関節窩後方に骨移植を行い、リバース型人工関節を行っていました。次に、North Carolina で行われた ASES closed meeting に参加しました。全米でも屈指の有名ゴルフコースに併設されたホテルで開催されました。残念ながら私はゴルフをしませんのでプレーはしませんが、温かい気候の中のんびりとした時間を過ごすことができ、いい骨休みになりました。” Young guns ” というセッションがあり、Engaging Hill-Sachs lesion に対して Latarjet か Remplissage か、TSA では short stem か standard stem か、TSA 展開の時に Lessor tuberosity osteotomy か subscapularis tenotomy か、若手の 1対1の議論がありました。若手だけあって正直な意見が聞かれ興味深いセッションでした。

ボストンの Harvard/Massachusetts General Hospital では Dr Warner と Dr Higgins の手術見学を行いました。Dr Warner の手術では関節窩後方の骨欠損が大きい type C glenoid に対する骨移植を併用したリバース型人工関節置換術を見ることができました。術前の計画として 3次元 CT 画像を用いてインプラントの設置角度や骨切り角度などを決めコンピューター上で手術を模擬した画像を手術室内に掲示してそれを参考にして手術を行っていました。Massachusetts General Hospital は世界初の麻酔下の外科手術が行われた病院であることでも知られています。頸部腫瘍の患者に対してエーテル麻酔を使用した手術が公開で行われました。その時に使用した場所は Earther dome として今も一般公開されています。

数日間で訪問先を飛行機で移動するというハードな日程の 4 週間でしたが、一緒に旅をした船越先生にも何度となく助けられて無事に旅を終えることができました。今回経験させていただいたことを生かして今後は日本肩関節学会ならびに会員の先生方に何らかの形で還元できればと思っております。最後に Traveling Fellow 応募にあたり私を学会に推薦してくださいました井樋栄二先生、留守中外来への代診、会議の代理出席や雑用をこなしてくれた東北大学肩グループの先生方に深謝いたします。

Dr Levine (下段右から 3 人目) および彼のフェローとの夕食の席。
この施設では韓国からの Traveling Fellow も一緒だった。

JSS/ASES Traveling Fellow

船越忠直 (北海道大学)

今回は、2014年9月20日より10月22日の約4週間にわたり、東北大学 山本宣幸先生とアメリカの各施設を訪問する機会をいただきました。船越が Los Angeles, Gulf Breeze, Greenville, New York を報告いたします。

LA (Dr. Tibone, Dr. Itamura, Dr. ElAtracche, Dr. Thay Lee)

LAでは、Kerlan-Jobe clinic、VA long beach, White memorial medical center, UC Irvineなどの施設を1週間かけて見学いたしました。大学病院、Private病院、研究施設が共同体を形成して、非常に効率のよい基礎的、臨床的研究がすすめられる環境だと感じました。Kerlan-Jobe clinicでは、鏡視下腱板手術、SLAP修復術をはじめとする様々な鏡視下手術をDr. Tibone、Dr. ElAtraccheに見せて頂きました。Dr. Itamuraには、主に人工関節手術を中心にみせて頂きましたが、カリフォルニア各地から術後に問題となったような感染、脱臼、ゆるみなどが送られてくるとのことでした。やはり人工関節の手術が多いためか、再手術例も非常に困難なものも含め、多くの症例があると思いました。



Dr. James R. Andrews と

Gulf Breeze (Dr. Andrews)

今回はフロリダの Andrews Institute を見学させて頂きました。こちらも前述の Kerlan-Jobe clinic と同様に臨床的にも基礎的にも様々な報告をしている世界の opinion leader の施設で、やはり病院内の施設の充実が印象的でした。驚いたことは遠方より Dr. Andrews を紹介されるため、初診の翌日には手術することが多いことで、今回の外来見学の際に3人の MLB 選手の手術が翌日に行われました。また、同様に驚きの一つは、若い人には決して積極的に手術を勧めておらず、十分なりハビリを勧めていることでした。施設は非常に広く気候もとてもよいのでプロ選手での術後3ヶ月

くらい近くのビーチに宿泊してリハビリをしていくケースも多いようです。Dr. Andrews は精力的に外来、手術をされており、大変お忙しい中様々な質問に答えて頂きました。私の英語力では十分な discussion ができませんでしたが、ご自身で以前 AAOS academy で行った特別講演の講義をして頂きました。一緒にいた fellow もその講義を聞いており、このようなことは今までなかったと伺い大変特別なことと感激しました。

Greenville (Dr. Hawkins, Dr Tokish)

残念ながら Dr Hawkins の手術見学はできませんでしたが、以前の2つの病院と同様に非常に立派な施設を見学しました。大変お忙しい中、我々のために時間を割いて頂き、多くのアメリカの医師から尊敬されている先生だということが実感できました。我々と同世代の Dr. Tokish は元々 Hawkins clinic のフェローで今年からこちらの施設に加わったようですが、特に時間をさいて dry labo による鏡視下肩鎖関節再建、後方関節包縫縮方法、TSA を教えて頂きました。これから Dr. Tokish が基礎的な研究をすすめていくと伺ったので、多くの優れた研究がこちらの施設から報告されるのは間違いなく感じました。

NY (Dr. Levine)

Columbia 大学は多くの fellow, resident が朝6時15分から熱心に研修をしていました。他施設は多くは臨床およびそれに関連する基礎研究が中心でしたが、大学らしく教育、基礎もたくさん人間が関わり多くのプロジェクトが進行していました。特に研修医同士で報告し、質問しあうシステムは、緊張感もあり日本の大学でも取り入れられてよいのではないかと感じました。

NYではマンハッタンの中心にあるColumbia University分院でDr. Levineの外来見学と、Columbia大学での外来見学を行いました。Dr. Levineの外来ではPrivateの患者さんのみを対象としており、一方、Columbia大学の外来はgovernment insuranceの患者が多いとのことで、両者の比較からアメリカが抱える保険制度の問題点も痛感しました。

私はこのTraveling Fellowで多くの海外のDrと関わりをもつ大変貴重な経験をさせて頂きました。ASESからの公式の訪問ということでどの施設でも心のこもったおもてなしをして頂きました。紙面をお借りして御礼申し上げます。日本の代表として意見を求められたときに、どこまで適切に自分の意見を伝えられたかは疑問ですが、多くの若い日本の先生に同様の経験をして頂くことを強くお勧めしたいと思います。日本肩関節学会が進める国際化には、日本の中にいて論文を読んでいるだけではわからないことがたくさんあるように思えました。最後にこのfellowの企画にご尽力いただきました井樋前理事長、菅谷委員長をはじめとする国際委員会の先生、肩関節学会の理事、評議員、会員みなさま、4週間もの長い間留守にすることを快く承知していただきました北大整形外科岩崎教授、上肢班の先生そして家族に感謝申し上げます。このfellowは山本宣幸先生とご一緒させて頂かなければ、このような素敵な経験をする事ができなかったことは間違いありません。改めて御礼申し上げます。



Dr. Neal S. ElAttrache と

JSS/SECEC Traveling Fellow

大前博路（松山赤十字病院）

Oh先生（写真左）、Mole先生（中央）と私（右）：
フランス・ナンシーにて

2014年9月17日から10月18日までJSS-SECECトラベリングフェローとして韓国のJoo Han Oh先生とともにヨーロッパで研修してきました。イスタンブールでSECEC annual meetingに参加したのちに、Daniel Mole先生（フランス・ナンシー）、Alessandro Castagna先生（イタリア・ミラノ）、Laurent Lafosse先生（フランス・アヌシー）、Bernhard Jost先生（スイス・ザンクトガレン）、Carlos Torrens先生（スペイン・バルセロナ）、Frank Gohlke先生（ドイツ・ヴェルツブルク）、Angus Wallace先生（イギリス・ノッティンガム）、Markus Wambacher先生（オーストリア・インスブルック）の病院を訪れました。毎日たくさんのご経験を、あっという間に終わってしまいました。とても高名な先生方に大変良くしていただきました。このような経験は二度とできないような気がします。

これまでヨーロッパからのフェローを日本肩関節学会の先生が歓待しているからだと思います。

2014年4月にリバーズ型人工肩関節置換術（RSA）が日本ではじまり、私は4肩に行った状態でヨーロッパに行きました。RSA術後の感染・脱臼・抜去中のひどい骨折などの合併症に対する再手術や再・再・手術を見て、RSAを行うからには合併症が生じたときに対処できる知識と技量を持たないといけないと思いました。また高齢者の新鮮骨折に対するRSA術後早期に、患者さんが外来でひょいっと手をあげたときには驚きました。これまで腱板のより良い生物学的修復を目指してきた自分にとっては人工関節というまったく別の手法に違和感がありまし

たが、この研修後は積極的に RSA を行うようになりました。研修中に、私は鏡視下の腱板修復やバンカート修復を 600 肩以上してきたが感染は 1 肩もないと言うと、それはきちんと診ていないからだと言われたり、まず腱板修復を試みてダメだったら RSA ではないのですか、と聞いたならそれは時間とお金の壮大な無駄だ、とも言われました。確かに最初から RSA を行えば感染率も低く、機能回復も良く、患者さんには良い方法と思うようになりました。しかし肩峰下のあの大きな死腔はどうなっているのかわからないし、新鮮骨折での適応の範囲や腱板修復との境目については答えはないように思いました。ただ、RSA は間違いなく回復が早く、患者さんに喜ばれる方法だと実感しました。

反復性肩関節脱臼に対して私は、若い人には将来的に悪くなる可能性があることはしたくないとの考えで鏡視下バンカート修復のみを行ってきました。研修中に直視下のきれいな腸骨骨移植術や鏡視下の Latarjet 法を見て、関節包の修復や関節軟骨面の修復についてのそれぞれの先生方の違う意見を聞いて、自分が良いと考えてきたことも、また違うのではないかと思うようになりました。

今回訪れた先生方は世界中からフェローが集まってくる、すでに頂点にいるような偉い先生ですが、それぞれが良いと思う方法で、元気いっぱいたくさん手術をする魅力的な外科医でした。自分も年を取ったときにこうありたいと思いました。

今回研修の機会を与えていただいた日本肩関節学会の先生方、一般病院に勤務しながら1ヶ月以上の休暇を取って迷惑をかけてしまった松山赤十字病院の先生方、師匠である県立広島病院の望月由先生、広島大学の越智光夫教授にこの場を借りて心から御礼申し上げます。



Gohlke 先生（写真中央の長身の先生）とフェローの先生たち、Oh 先生（一番左）と私（前列中央）：ドイツ・バートノイシュタットにて

▶ 各委員会からのお知らせ

40 年史編纂委員会

担当理事 井手淳二

40 年史編纂委員会では、日本肩関節学会 40 年の節目に日本肩関節学会 40 年史を作成し、日本肩関節学会ホームページに掲載することを企画しています。先人の業績を大切にしながら、今後もこのページに肩関節学会の歴史を追記していけるように作成する予定です。

内容（案）ですが、

1. 挨拶文
2. 日本肩関節学会の黎明：肩関節研究会の創設：信原克哉先生
3. 組織体としての日本肩関節学会の変遷：柴田陽三先生
4. 日本肩関節学会としての国際交流：小川清久先生
5. アジア肩関節学会の発足と発展：筒井廣明先生
6. 歴代学術集会会長一覧表

内容・特色を簡潔に要約した内容を加える。

第 41 回日本肩関節学会で配布された USB の内容（雑誌肩関節第 1 巻－ 37 巻、第 1 回から 40 回学



会抄録集)にリンクし、追加できるようにする。

7. 名誉会員・物故名誉会員の略歴（顔写真、生年、没年、幹事就任年、名誉会員就任年、現役中の活動（所属機関）、幹事在任中の委員会活動）および特筆すべき活動などについて（同輩、後輩）に記載してもらう。
8. 高岸直人賞受賞者一覧（年、受賞者名、写真、所属、論文名、論文のPDF）
9. トラベリングフェロー一覧：（日欧、日韓など、年、留学者名、所属）
10. 教育研修委員会：第1－6回教育研修会（日時、場所、タイトル、演者名、所属）
11. 歴代委員会委員（委員長）
12. その他
 - (1) 国際学会などで表彰された人、論文名、論文のPDF（会員に依頼）。
 - (2) 会員から日本肩関節学会や肩に係る国際学会へ参加した際のブログ集のページを作成。
 - (3) 会員、全国整形外科教室に日本肩関節学会ホームページの日本肩関節学会40年史掲載について告知する。
 - (4) JSES 支援学会に日本肩関節学会ホームページの日本肩関節学会40年史掲載について告知する。
 - (5) 6月までにHPに1－11のページをアップし、その後、変更・追加する。

以上ですが、よりよい日本肩関節学会40年史サイトを作成したいと思いますので皆様のご意見をよろしくお願い致します。

40年史編集委員会（敬称略）

担当理事	委員長	委員	アドバイザー
井手淳二	筒井廣明	伊崎輝昌 林田賢治 内山善康 船越忠直 菊川和彦 北村歳男	小川清久

リバーズ型人工肩関節運用委員会

担当理事 井樋栄二

2014年4月から本邦においてもrTSAが使えるようになりました。本人工関節は、日本整形外科学会が作成したガイドラインがあることで厚生労働省より認可されています。講習会時にすでに説明しましたように、ガイドラインで5年間の全例登録が義務づけられています。登録は、日本人工関節学会の登録用ホームページ (<http://jsra.info/jar-entry.html>) から登録用紙をダウンロードし、必要事項を記入してFAXで学会事務局へ送付することで完了します。現時点で使用人工関節の数に比べて登録件数が少ないようです。つきましては、rTSAを施行されました先生には速やかに登録下さいますよう、お願いいたします。なお、患者登録に関しては、1か月ごとにまとめてご登録下さるようお願いいたします。未登録施設の先生に対して本委員会よりメールを差し上げますので、ご協力下さいますようお願いいたします。



社会保険等委員会

担当理事 米田稔

社会保険等委員会の新メンバーは、担当理事の米田稔、副担当理事の中川照彦先生、委員長の橋口宏先生、そして委員としての岡村健司先生、菊川和彦先生、菅谷啓之先生、杉本勝正先生、鈴木一秀先生、高瀬勝己先生、名越充先生、望月智之先生、森澤佳三先生である。

社会保険等委員会の主な業務は診療報酬に関すること（外保連を窓口とした手術術式の改正：新設・改訂、手術材料など）、新しい医療機器：デバイス・器具などの導入に向けた働きかけ、手術のアンケート調査（厚労省に提出する外保連試案の様式の中に年間の手術件数など細かく記載する欄がある）などである。

日本肩関節学会は昨年4月28日に外保連に加盟した。外保連委員は目下、実務委員：中川照彦先生、手術委員：橋口宏先生、処置委員：高瀬勝己先生、検査委員：杉本勝正先生である。厚労省の都合もあり、外保連委員会は突然開催されたり、短期間でデータ集積を求めてきたりすることが多く、ご多忙な中、本当に申し訳なく思っている。しかしながら、これら外保連委員の職務は肩領域の診療報酬を決定づける上で極めて重要である。今年かねてからの念願であった肩複合手術を「反復性脱臼手術+腱板断裂手術」と「人工関節（人工骨頭）置換術+腱移行術」の2点に絞って要望した。社保委員会委員長兼外保連手術委員の橋口宏先生の頑張りを大いに期待しているが、どうか会員の皆様もこれら新規改正要望項目が承認されるよう各方面よりのご支援をお願いしたい。超音波断層エコー検査は今や肩領域ではなくてはならない必須アイテムであるが、未だ診療報酬制度に関しては地域格差が大きい。この点に関して、まずは外保連検査委員の杉本勝正先生に評議員の先生方への実態調査をお願いした。そしてこれらデータを元に地域格差が是正できるように外保連委員会へ働きかけて行く方針である。なお、外保連実務委員である中川照彦先生は目下理事職であるが、先生の力なしでは弱体化は避けられない。編集委員会担当理事との兼任となるが、当面は副担当理事として社会保険等委員会を補佐して頂く。

昨年、4年ぶりに第2回手術アンケート調査（2013年1月1日～12月31日）が行われた。その集計結果報告は望月智之先生を中心に最終段階に入っている。6月には原稿も完成し、会員専用ホームページもしくは雑誌肩関節で皆様にご覧頂けるはずである。ただ、残念なことは第1回の手術アンケートよりも低い回収率であったことである。次回アンケート調査では原因を明らかにし、より高い回収率を目指したい。

次なる目標に向かいつつも、汗と涙の結晶である現行の診療報酬点数が減点されることがないよう新メンバー丸となって責務を全うして行きたいと考えている。社会保険等委員会へのご意見や診療報酬等に関するご要望があれば、どうか遠慮なく事務局までご一報頂きたい。出来る限り会員の皆様のために開かれた委員会であり続けたいと願っている。

雑誌『肩関節』編集委員会

委員長 濱田一壽

今年度の雑誌『肩関節』編集委員会は、担当理事は中川照彦先生に替わり、委員長：濱田一壽、新たに副委員長：岩堀裕介先生、内山善康先生を含め27名（昨年は20名）の委員で構成されています。掲載論文の質をよりよくするため、web会議を含め例年4-5回の委員会を開いております。雑誌『肩関節』の査読は、1回目は42名（昨年は34名）の査読委員と、編集委員以外の代議員、役員（各々4編程度）、編集委員（7編程度）の3人1組で行う予定です。2回目以降は編集委員が行い、大きな問題のある論文は最終的に全員で審査します。



[報告事項]

1) 第 38 巻から internet journal になり、雑誌および別冊の発行は中止しています。オンラインジャーナルには学会での発表論文、原著、総説、Letter to the Editor、査読者名簿などを掲載しております。掲載論文に関するご質問がありましたら、事務局までご連絡ください。掲載すべきと判断したものについては Letter to the Editor に掲載いたします。

2) 第 40 回日本肩関節学会(2013 年)の発表演題 357 のうち、第 38 巻の発表論文としての掲載は 168(辞退 12、reject 6)、proceeding としての掲載は 23(辞退 1) であり、合計 191 編(投稿論文の 91%、発表演題の 53.5%) が掲載されました。第 37 巻は掲載論文 218 編(投稿論文の 95.6%、発表演題の 55.5%) でした。第 41 回日本肩関節学会(2014 年)の発表演題 333 のうち雑誌『肩関節』に投稿された演題は、発表論文 136 編(学術論文 102、原著・総説 13、症例報告 21)、proceeding 25 編の合計 161 編でした。徐々に発表論文の投稿、掲載が減少しているのは気にかかるところです。英文雑誌への投稿予定など二重投稿の恐れがあるものは proceeding での投稿はやむを得ませんが、論文として掲載可能なものは proceeding ではなく論文としての投稿をお願いいたします。また、今年の社員総会では雑誌『肩関節』への投稿論文に雑誌『肩関節』の proceeding の引用を許可されましたが(抄録は引用できません)、proceeding は学会での発表の記録であり、手続き上、編集委員会において内容の精査ができません。編集委員会としては、引用文献は proceeding ではなく論文を推奨いたします。

3) Web 投稿・Web 査読システムと投稿規定

アトラス社の Editorial Manager を使用し、Web 投稿・Web 査読を開始しました。投稿は日本肩関節学会のホームページから EM へ貼ったリンクを通して行います。まだ不慣れであり、また投稿・査読システムは急造したものなので不備な点が多々あるかと思えます。ご質問、疑問点は事務局に連絡してください。Web 投稿の開始に伴い、投稿規定の改訂を行いました。ご注意ください。

統計手法の統一化のため、統計学専門家と相談して編集委員会で手引きを作成しました。統計手法については統一見解が得られていない部分もありますので、ご質問・疑問点がありましたら、カバーレターに記載いただくか事務局にご連絡ください。また、この手引きに掲載されていない手法を使用する際にも、その理由をカバーレターに記載いただくか事務局を通じてご連絡ください。ご連絡いただいた内容を編集委員会で検討して回答いたします。

施設の倫理委員会を通すべき研究として、正常例の研究、保険適応が認められていない薬剤などを使用した研究とします。その他については倫理委員会で検討する予定です。

経過観察期間についてのご質問が多くみられましたが、新しい手術法、高齢者の骨折など、やむを得ない理由で 1 年以上の経過観察をしていない論文については、従来通り編集委員会で掲載の可否を審議することになります。

4) その他

雑誌『肩関節』第 38 巻に撤回論文の告知を行いました。

雑誌『肩関節』に掲載した論文の投稿の可否については現在のところ、JSES にはすでに投稿可能との返事をもっており、CORR は編集委員長が掲載に値すると判断した場合に査読が開始されます。詳細は日本肩関節学会事務局にお尋ねください。

皆様のご理解ご協力をよろしくお願いいたします。



事務局からのお知らせ

群馬大学整形外科より日本肩関節学会の事務局業務を受託することになりました株式会社アイ・エス・エス (ISS) と申します。

第41回学術集会後より理事の先生方、群馬大学整形外科の山本敦史先生、事務局の方々に日々ご指導いただきながら業務の引継を行い、2015年1月23日に事務局業務委託の締結を致しました。また事務局の新移転先の通知書を会員の先生方へお送りさせていただきました。

40年の歴史のある日本肩関節学会の事務局を担当させていただくことを光栄に思うのと同時に責任の重さを実感しながら業務をおこなっている日々でございます。

日本肩関節学会の国際化や一般社団法人としての社会的役割を全うするなど、学会発展の力になれるよう尽力する所存でございますが、会員の先生方への十分な情報提供・ご案内をおこない先生方にご満足いただける事務局の運営を行うのも最も重要な業務のひとつです。一度に満足いただける環境を整えることは難しいですが、ひとつずつでも奮闘して参りたいと思っております。しばらくはご迷惑をおかけすることも多いかと思いますが、何卒、ご指導ご鞭撻いただきますようお願い申し上げます。

簡単に弊社の紹介をさせていただきます。

アイ・エス・エスは、1965年に創業し、本年で50周年を迎えます。日本で初の同時通訳者養成学校を創立し、数多くのプロフェッショナル通訳・翻訳者を国際舞台に輩出してまいりました。また、国際会議、通訳・翻訳、人材ビジネス等の分野においても50年の実績を積んで参りました国内で最も歴史のあるPCO(Professional Congress Organizer)です。弊社コンベンショングループで事務局業務を受託いたしました。私どもは事務局業務請負のほか、医学系の国際・国内大会、民間組織・公的機関・国際機関の国内外会議・セミナー・展示会などの企画・運営も行っております。特に国際会議運営では、弊社の通訳・翻訳サービスとタイアップして質の高い総合サービスを提供できる企業でございます。

最後に、これまで学会の事務局を遂行いただいております群馬大学整形外科のみなさまに厚く御礼申し上げます。

【移転先所在地】

〒108-0073

東京都港区三田 3-13-12 三田MTビル8階

株式会社アイ・エス・エス内

一般社団法人日本肩関節学会 事務局

TEL: 03-6369-9981 / FAX: 03-6369-9982

E-mail: office@shoulder-s.jp

※メールアドレスに変更はありません。

◎業務開始: 2015年2月2日(月)



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

編集

広報委員会

後記

山本敦史

2014年10月23日に一般社団法人としての初めての社員総会が開催され、玉井和哉新理事長のもと、当学会の新たな体制がスタートしました。ニュースレターの編集を行っております広報委員会も新担当理事として望月由先生をお迎えし、新たな委員として石田康行先生、北村歳男先生、夏恒治先生に加わって頂きました。前回からの委員である池上博泰委員長、新井隆三先生、中川泰彰先生、松村昇先生と山本も引き続き広報委員として活動させて頂きます。

広報委員会が新体制となってから初めてのニュースレターをここにお届け致します。今回は、理事長、役員のご挨拶、学術集會会長のご挨拶、トラベリングフェローの帰朝報告、委員会からのお知らせなどを掲載させて頂きました。ご多忙にもかかわらず執筆頂きました先生方にこの場をお借りしまして深謝致します。

玉井理事長がご挨拶の中でglobalizationを目標として挙げていらっしゃいますが、広報委員会も国内外への情報発信の中心として、当学会発展のお手伝いをさせて頂きたいと考えております。今後ともよろしくお願い致します。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人 日本肩関節学会 広報委員会

望月由（担当理事）、池上博泰（委員長）、新井隆三、石田康行、北村歳男、中川泰彰、夏恒治、松村昇、山本敦史

発行：一般社団法人 日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階 株式会社アイ・エス・エス内

TEL 03-6369-9981 / FAX 03-6369-9982

E-mail office@shoulder-s.jp URL <http://www.j-shoulder-s.jp/>